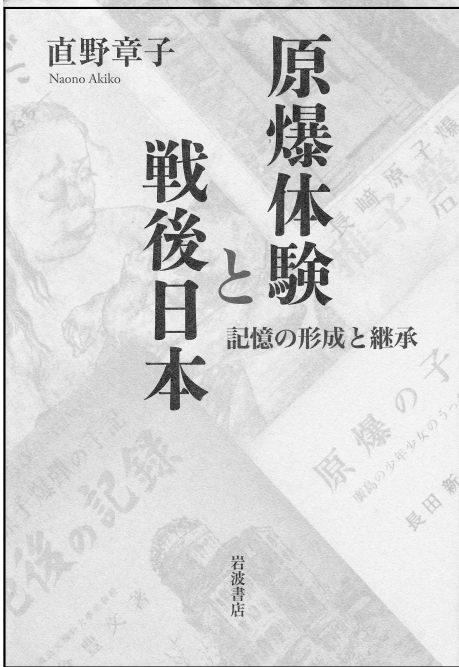


直野章子著 『原爆体験と戦後日本——記憶の形成と継承』

水溜 真由美



筆者が学生時代を過ごした一九九〇年代、「戦争の記憶」をめぐる問題が大きな注目を集めた。当時、日本軍「慰安婦」問題が提起され、十五年戦争の被害者が次々と賠償を求めて訴訟を起こした。不十分ながら日本政府の間に加害責任を認める動きが生まれる一方で、新しい歴史教科書をつくる会を始めとする歴史修正主義の動きも活発化した。その後世の中は大きく変化したが、「慰安婦」問題であれ、歴史認識の問題であれ、当時提起された問題はどれ一つとして解決を見ていない。他方で、今日我々は「戦争の記憶」をめぐる豊富な議論の蓄積を手に行っている。

一九九〇年代以降のアカデミズムにおける「戦争の記憶」をめぐる議論にはいくつかのポイントがある。その一つは、戦争の記憶が言説により事後的に構成されたものだということである。中でも、それが国家・国民を土台とする集合的な記憶として、つまり「国民の物語」として形成されてきた点に大きな関心が向けられてきた。他方で、トラウマ記憶についても様々な議論がなされてきた。極限的な体験をめぐるトラウマ記憶は、集合的な記憶とは

対照的に、言語化や物語への回収に抗うような性格を持つている。こうしたトラウマ記憶の性格は、しばしば極限的な出来事の表象可能性といった問題とも関連づけて論じられてきた。

トラウマ記憶とは個人のプライベートな記憶であり、パブリックな性格を帯びた集合的な記憶の対極に位置している。他方で、個人の記憶は必ずしも集合的な記憶と対立関係にあるわけではなく、公的な語りの影響下にあることが少なくない。とはいえ、戦争体験のコアにあるのは極めて非日常的な、むき出しの暴力に曝される体験であり、個人の記憶と集合的な記憶の間には、なにがしかの乖離やズレがあるということの方が普通であろう。人間の生死に関わるような極限的な体験を持つ個人の記憶は、総じてトラウマ記憶と地続きであるとも言える。他方で、こうした個人の記憶と集合的な記憶のズレは、集合的な記憶の変化を促す一つの要因でもある。集合的な記憶は決して不変ではなく、しばしば何らかの出来事をきっかけとして、あるいは時間の経過と共に大きく変化する。そして、個人や集団による能動的な働きかけがその契機となることも少なくない。

本書評の対象となる直野章子『原爆体験と戦後日本——記憶の形成と継承』は、タイトルが示すとおり、戦後日本における原爆体験をめぐる記憶の形成と継承について論じた著作である。冒頭で述べた枠組みに照らせば、本書は個人の記憶と集合的な記憶の間にあるせめぎ合い、あるいはダイナミズムを、原爆体験をめぐる記憶に即して時系列的に明らかにした本だと言うこともできよう。

本書の中で著者が繰り返し主張しているのは、「被爆体験」とは原爆に遭遇した体験そのものではなく、言語によって媒介された記憶にほかならないことだ。それどころか著者は、「被爆」あるいは「被爆者」それ自身が言説による構成物だと主張する。たとえば、今日の我々は爆心地を中心とする「同心円イメージ」を交えることなく、「被爆」について語るができない。ここには、法や医科学言説の大きな影響が見られる。また、我々は「被爆」を放射線による被害として捉えがちだが、敗戦間もない時期には、原爆の被害は空襲被害として捉えられる傾向が強かった。

「被爆」や「被爆者」をめぐる言説の形成に最大の影響を与えた出来事は、一九五四年に発生した第五福竜丸事件である。アメリカの水爆実験による日本のマグロ漁船の被害は、遡行的に過去の原爆の被害をクローズアップし、それが原水禁運動と被爆者運動の開始につながった。被爆者運動は「被爆者」の主体化を促す一方で、一九五七年に、その一つの成果として原爆医療法を制定させた。行政制度としての原爆医療法は、以後「被爆者」を救済すると同時に、「被爆者」とは誰のことを定義する役割を果たしてきた。

第五福竜丸事件のもう一つの帰結は、「被爆」と「平和」の接合を促したことである。二〇一一年の福島原発事故の後、被爆国であるはずの日本においてこれほど大きな原発事故が発生したのはなぜかという問題提起が行われた。とりわけ、平和運動家や知識人は一体何をしていたのかという問いかけが陰に陽になされ、平和運動や知識人の言説の中で核の軍事利用と平和利用の差別化が行われてきたことが明らかにされた。しかし、本書によれば、

被爆者が核兵器の廃絶や平和を希求するはずだという前提そのものが問題を含んでいる。「ノーモア・ヒロシマ」というスローガンは、ある歴史的なコンテクストの中で、とりわけ第五福竜丸事件後の原水爆禁止運動の盛り上がりの中で、ナショナルな枠づけを伴いつつ形成された一つの「言説」にすぎない。たとえば、敗戦後まもない時期の広島では、原爆が「平和」を招来したとする、原爆投下を正当化しかねない言説（「原爆平和招来説」）が広く流通していた。

ここで注意すべき点は、著者が原爆体験を持つ個人を専ら「被爆体験」をめぐる公的な言説の受け手として捉えているわけではないことである。著者は、被爆者個人あるいは被爆者団体もまた、集合的な記憶の形成に関わってきたことを指摘する。たとえば、「被爆」を放射能による被害として捉える言説は、被爆者と空襲などの戦争被害者との分断を生んだが、それは被爆者団体が国家からの補償を得るため原爆被害の特殊性を強調した結果でもある。また、非日本人の被爆者の存在を不可視化する「被爆者ナシヨナリズム」の広がりには、被爆団体が非被爆者の共感を得るために国民の連帯感情に訴えかけながら運動を展開した結果でもある。

他方で、著者は被爆者によって書かれた膨大な原爆体験記を分析対象としながら、原爆体験をめぐる個人の記憶と集合的記憶のズレや乖離、そして重なりを丁寧にあぶり出している。たとえば、著者は、戦後の早い時期に書かれた原爆体験記の多くに我々が期待するような反原爆や「平和の訴え」が書かれていないことを指摘する。「ノーモア・ヒロシマ」が「被爆」をめぐる支配的な言

説に組み込まれた後でさえ、原爆体験記には、被爆の後遺症や被爆者に対する差別や家族や友人を失ったことについての苦悩が「平和の訴え」に収斂しない形で綴られてきた。他方で、著者は、多くの原爆体験記が家族や友人の死を物語化していることにも注意を促す。一面において、それらは物語への死の回収であり、原爆による死の合理化にもつながりかねない。ただし著者は、「殉国の語り」であれ、「平和の礎」論であれ、「平和の訴え」であれ、そうした物語の背後には、身近な他者を失った者の癒し得ない悲しみや死の不条理性が存在することを指摘する。

また、著者は、朝鮮人被爆者の体験記の分析を通じて、朝鮮人被爆者と日本人被爆者の間の記憶のズレをあぶり出している。朝鮮人被爆者の体験記に頻繁に見られる日本人からの差別の体験や植民地支配をめぐる批判的記述は、朝鮮人被爆者の体験の固有性を明らかにすると共に、日本で流通している原爆体験をめぐる言説のナシヨナリスティックな偏りを逆照射する。

さらに、本書の第六章はトラウマ記憶の分析にあてられている。原爆体験のような過酷な体験は表現したり伝達したりすることが困難であるうえ、当事者にとってさえ意味づけられないものであることが多く、当事者は出来事について沈黙する傾向がある。著者は、原爆体験記や被爆者が描いた絵画に依拠しながら、そうしたトラウマ記憶への接近を試みている。そこで著者は、被爆者にとつての被爆体験が言語秩序を崩壊させる体験であることや、被爆者が原爆投下直後の状況と日常世界の「臨界領域」に生き続けていることや、サイバーとして死者の人間性を回復せんとする強い願いを抱えていることなどを読み取っている。

序論において、著者は、ポスト構造主義的な観点から原爆の記憶について論じた先駆的な著作として、米山リサ『広島——記憶のポリテクス』（小沢弘明ほか訳、岩波書店、二〇〇五年）を挙げている。本書は米山の視座を継承しつつも、八〇年代を中心に文化表象に着目して原爆の記憶を論じた米山に対して、原爆の記憶の形成・変遷をより長いスパンで捉え、国家や被爆者運動についても目配りを行っている点で、より包括的な研究となっている。他方で、著者が膨大な原爆体験記を素材として、当時者の体験、記憶について緻密な分析を加えている点は、被爆者に対するインタビューを素材として原爆体験の心理的影響を考察したロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く——精神的考察』（榊井迪夫ほか訳、一九七一―二〇〇九年、岩波書店）を想起させる。言説をめぐる研究は、時として複雑な現実を平板な「言説」の束に還元してまう暴力性をはらんでいるが、本書がそれを免れているのは、原爆体験をめぐる豊かな実証研究に敬意を払い、また多層的な被爆者の声に耳を傾けているからだと言えよう。

本書は戦後七〇年の節目に出版された本であるが、今日原爆体験を持つ生存者の数は日を追うにつれて減っており、「被爆体験の風化」がいよいよ深刻になっている。だが、終章「被爆の記憶を引き継ぐために」において、著者はこうした状況について必ずしも悲観的な態度を示していない。なぜなら、「原爆被爆体験も被爆者という主体性も戦後日本における言説活動の所産であり、原爆被爆体験は被爆者の所有物では必ずしもない」からである。つまり、「被爆体験」とはそもそも言説活動の所産である以上、

今後の日本あるいは世界にける「被爆体験」の有り様は、言説の担い手となる我々あるいは未来の世代によって決定されるということであろう。

とはいえ、被爆者が死に絶えてしまえば、集合的な記憶と個人の記憶との間のダイナミズムが失われ、原爆をめぐる記憶が忘却されたり、融通無碍に改編されたりする危険性が高まることも否定できないだろう。著者も、「被爆者」と「非被爆者」の境界線は不変ではないにせよ、皆無ではないことを認めている。だからこそ我々は、一方で出来事そのもの、あるいは言説に回収されない記憶の重みに思いをはせ、他方で集合的な記憶が形成されるダイナミズムに敏感になる必要がある。そのことを学ぶ上で、本書は最良の書物である。

（二〇一五年七月二四日 岩波書店 二八八頁 三二〇〇円＋税）